

爲めに盡くしたいと云ふの考へで、密かに米國の軍艦へ乗り込んだ、當時は外國へ渡るど云ふことは幕府から堅く禁せられてあるから其事が知れると直様捕へられて、同行して居た瀧木貞吉と云ふ人と共に下田の牢屋に拘禁せられた、其頃の牢屋と云ふものは今こは違つて檻房は僅かに三尺四方位で其様な挾き處に、二人居るのであるから、其困苦は思ひ量られる、徒然の餘り、赤穂義臣傳、眞田三代記などを読みて、兩人共に自ら萬死を期し、再び出獄すると云ふことは、夢にも思はなかつた、そうだが、或日松陰先生瀧木に語る様は「今日の讀書こそ眞の學問である、昔し漢の夏侯勝、黃霸の兩人、共に獄に下つたが、夏侯勝は儒學者であるから、黃霸が侯勝に學

問を授りたいと頼みた、其時侯勝が曰ふには遠からず罪死刑に遇ふべき身だから、學問は死すとも可なりと云ふこともあれば、是非とも授かりたしと頼みしに、侯勝も其辭に感じて、遂に承諾し、三年の間講論を怠らざりし入らぬと、黃霸が曰く、朝に道を聞て夕に死すとも可なりと云ふこともあれば、是非とも授かりたしと頼みしに、侯勝も其辭に感じて、遂に承諾し、三年の間講論を怠らざりしも授かりたしと頼みしに、侯勝も其辭に感じて、遂に承諾し、三年の間講論を怠らざりしも授かりたしと頼みしに、侯勝も其辭に感じて、遂に承諾し、三年の間講論を怠らざりしことは夢にも知らぬことである、然るに道を兩人に在ることとは固より他日の大赦のあるが、後大赦に遇ふて再び官に登りたと曰ふ、兩人獄に在ることとは固より他日の大赦のあることは夢にも知らぬことである、然るに道を樂むの厚き、學を好むの至り斯の如くである今我等兩人とも亦此意を師じすべし」と申されれば、瀧木氏は涙を揮つて喜ばれた云々以上は講孟餘話の中にある事實譚であるが松陰はこの事を書き終つて次に左の數語を残された、

今此章（盡心篇の夭壽不貳の下）を読み前日の説を合する所あるを喜び、又瀧木生溢焉として死し、復共に此章を講論することを得ざるを悼み、泣然として涙下る云々。

ある、下田の牢屋に瘡を病み憤慨の涙と共に世を去りたる瀧木貞吉を憐れみて泣きたる松陰が、わづか半年の後、江戸の牢屋にて断頭場裡の露を消へうせたのである、無常と云はふか、轉變と云はふか、人生之にすぎた悲惨はなかろう、されど先生が自ら萬死を期しながら、書を読み道を講ぜられた精神は、親を思ふ心にまさる親心。

今日のおづれ何ご聞くらん  
の歌と共に、遠く萬代を照らして忠臣孝子の

腸を搾るのである。  
雜錄 吉田松陰の士規

佐久間象山の門に遊んで尊攘の志士に交はり、米艦の浦賀に来るに及び之に投じて西洋に航し、海外の形勢を察せんとす、果さず、後其郷里長州に松下村塾を開き一藩の子弟を鼓舞し、盛んに尊攘の説を唱ふ、安政の大獄に羅織せられて漸に處せらる、士規七則あり曰く、

一 凡ソ生レ爲リ人ト宜レシ知ル人ノ所以異ナル於禽獸ニ蓋人ニ有リ五倫而君臣父子ヲ爲ニ最大ナリ故ニ人之所以爲ル人忠孝ヲ爲レ本ト

一 凡生ル皇國ニ宜レ知ル吾カ所以ヲ尊ニ於内ニ蓋シ皇朝萬葉一統邦國士夫世

## ヨシタシヨウイン

襲<sup>ニヒ</sup>祿位<sup>ヲ</sup>人君養<sup>ヒ</sup>民<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>續<sup>ク</sup>祖業<sup>ヲ</sup>臣民

忠君以<sup>テ</sup>繼<sup>キ</sup>父ノ志<sup>ヲ</sup>君臣一體 忠孝一

致 唯吾國爲<sup>レ</sup>然<sup>リト</sup>

士道莫<sup>ハ</sup>大<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>義<sup>ヨリ</sup>義<sup>ハ</sup>因<sup>レ</sup>勇<sup>ニ</sup>行<sup>ヒ</sup>勇<sup>ハ</sup>

因<sup>レ</sup>義<sup>長</sup>

士行以<sup>テ</sup>質實不<sup>ル</sup>欺<sup>カ</sup>爲<sup>レ</sup>要<sup>ト</sup>以<sup>テ</sup>巧詐文

過<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>耻<sup>ト</sup>光明正大<sup>皆由<sup>レ</sup>是出<sup>ゾ</sup></sup>

人不<sup>レ</sup>通<sup>ニ</sup>古今<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>バ師<sup>ト</sup>賢聖<sup>一</sup>則<sup>チ</sup>鄙

夫<sup>タルノ</sup>耳<sup>讀<sup>レ</sup>書<sup>ヲ</sup>尙<sup>レ</sup>友<sup>ヲ</sup>君子之事也</sup>

成<sup>シ</sup>德<sup>ヲ</sup>達<sup>レ</sup>材<sup>ヲ</sup>師恩友益<sup>居<sup>レ</sup>多<sup>キニ</sup>焉</sup>

故<sup>ニ</sup>君子慎<sup>ム</sup>交遊<sup>ヲ</sup>

死而後已四字<sup>言簡<sup>ニシ</sup>而義廣<sup>シ</sup>堅忍果</sup>

決 確乎<sup>トシテ</sup>不可<sup>レ</sup>拔<sup>ク</sup>者<sup>舍<sup>レ</sup>是<sup>ヲ</sup>無<sup>レ</sup></sup>

術也

右士規七則 約<sup>シテ</sup>爲<sup>ス</sup>三端<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>立志以<sup>テ</sup>爲<sup>ニ</sup>

萬事之源<sup>ヲ</sup>擇友以<sup>テ</sup>輔<sup>ニ</sup>仁義之行<sup>ヲ</sup>讀書以<sup>テ</sup>稽<sup>ニ</sup>

聖賢之訓<sup>ヲ</sup>士苟<sup>モ</sup>有<sup>レ</sup>ハ得<sup>ニ</sup>於<sup>此</sup>亦可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>

りなし、禾稼<sup>の</sup>必ず四時<sup>を</sup>經<sup>る</sup>如<sup>き</sup>にあ  
らす、十歲<sup>にして</sup>死<sup>する</sup>も十歲<sup>中</sup>自<sup>ら</sup>  
四時<sup>あり</sup>、二十は自<sup>ら</sup>二十の時<sup>あり</sup>、三十  
十は自<sup>ら</sup>三十の四時<sup>あり</sup>、五十百は自<sup>ら</sup>  
五十百の四時<sup>あり</sup>、十歲<sup>を</sup>以<sup>て</sup>短<sup>とする</sup>  
は穂<sup>を</sup>して靈椿<sup>を</sup>して靈椿<sup>を</sup>して穂<sup>を</sup>  
り、百歲<sup>を</sup>以<sup>て</sup>長<sup>とする</sup>は靈椿<sup>を</sup>して穂<sup>を</sup>  
は穂<sup>を</sup>して靈椿<sup>を</sup>して靈椿<sup>を</sup>して穂<sup>を</sup>  
せす<sup>ご</sup>す、義卿三十、四時<sup>已</sup>に備<sup>は</sup>る、  
亦秀<sup>亦</sup>實<sup>其</sup>朴<sup>た</sup>る<sup>と</sup>其<sup>栗</sup>た<sup>る</sup>と我<sup>が</sup>知<sup>る</sup>  
所<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>す、同<sup>志</sup>の士<sup>其</sup>微衷<sup>を</sup>憐<sup>れ</sup>み、  
繼<sup>紹</sup>の人<sup>あらば</sup>、乃<sup>ち</sup>後<sup>來</sup>の種<sup>子</sup>未<sup>だ</sup>絶<sup>へ</sup>す、  
自<sup>ら</sup>禾稼<sup>の</sup>有<sup>年</sup>に耻<sup>ざ</sup>るなり、同<sup>志</sup>それこれを思<sup>考</sup>せよ。  
又、死<sup>する</sup>七日前<sup>、</sup>書<sup>を</sup>家<sup>郷</sup>に致<sup>して</sup>曰<sup>く</sup>

## 二七三

成人<sup>ト</sup>矣

雜錄 吉田松陰の死生觀

吉田松陰、江戸の獄中にあつて死生を観じて曰く、

今日死を決するの安心は四時の循環に於いて得る所あり、蓋し彼の禾稼を見るに春種夏苗秋刈冬藏す、秋冬に至れば人皆其歲功の成るを喜び酒を造り體を爲り村野歡聲あり、未だ曾て西成に臨んで歲功の終るを悲しむものあるをきかず、予行年三十、一事なることなくして死して禾稼の未だ秀です實らざるに似たれば惜しむべきに似たり、然れども義卿の身を以ていへば、これまた秀實の時なり、何ぞ必ずしも悲まん、何となれば、人壽は定

さて其死ぬなご申すは近く申さば釋迦の孔子のと申す御方には今日生きてござるゆへ、人が尊みもすれば難有<sup>が</sup>りもおそれもある、果して死ぬではなひか、死なぬ人なれば纏目も牢屋も首の座も前に申す觀音經の通りでござらぬか、楠正成公<sup>ち</sup>やの大石良雄<sup>ち</sup>やのと申す人には、刃<sup>の</sup>ものに身を失はれ候へども、今以て生きてござるのは、刀のちんぐに折れた證據<sup>しょくこ</sup>でざる云々。

安政六年十月二十七日、彼は終に斷頭臺上<sup>の</sup>露<sup>を</sup>消<sup>へ</sup>ぬ、其辭世に所謂<sup>、</sup>身はたとへ武藏<sup>の</sup>野邊に朽ちぬとも<sup>と</sup>いめおかまし大和魂<sup>。</sup>の一咏は彼が死生觀の縮寫なり、死する七

ヨシノ

一七四

日前、書を家郷に致して曰く、  
平生の學問淺薄にして至誠天地を感格す  
ること出來不レ申、非常の爰に立至り申  
候、嘸々御愁傷も可レ被レ遊拜察仕  
候。

ヨシノ 吉野 【地名】

大和國吉野郡にあり、櫻花を以て著名にして一日千本  
の稱あり、

因縁 蓮如上人夜中の花見

蓮如上人、大和の本善寺へ御入りの時同  
行がより集り「只今は吉野山の花盛り、三國  
一の名山ゆへ御覽あそばされては如何でござ  
ります」申上たれば、「それは珍らしいイ  
ザこれから見物に行かう」と仰せられた、そ

こで同行が驚いて「今日はモハヤ日暮のこと  
ゆへ明日の事に遊ばしませ」と申上たとき、  
上人は、

明日までと思ふ心はあだ櫻

夜は嵐のふかぬものかは

と云ふ歌もある、明日と云ふ中に夜の間にさ  
んな事がであろうしれぬ、イザ只今より行う  
と仰せられ、提燈松明で御越しあそばした、  
吉野の里のものは「けしからぬ夜の花見、古  
今稀なるものすき」と笑はぬものはなかりた  
然るに其夜の夜半頃に本善寺へかへらせられ  
たが、雞鳴の時分より、そろ／＼雨風となり  
次第々々にはげしくなりて、夜の明けた頃に  
は吉野の花は一輪もない様に散つて仕舞ふた  
そこで先きに笑ひし人々も、大權聖者の御詞

の空しからざるに敬服したと云ふ話がある、  
「莫必ル明日之事ヲ天ニ有リ不測之風雲一人ニ  
有リ旦夕之災」と景行錄にあるも全くこの意  
であります。

ラ之部

ラクサイ 樂西

【人名】

攝津妙法寺の開基なり、弱冠をすぎて自ら祝髮し、天  
台宗に歸して、觀心を事さず

談叢 樂西法師の見識

樂西法師と云ふのは平家の全盛時代の人で  
攝津の和田山中に草庵を結んで日夕念誦を事  
としておられた。其行ひの清ひのと其徳の高

いので、其邊の人々は活佛のやうに崇信して  
おつた、平清盛がこれを聞いて請じて供養  
をせうとしたが、法師はこれを断つて「貧窮  
にして供養するのは出家の本分に背くが、今  
これを受けないのは出家の本分に背くが、今  
平相國の權威を以て一世を益ふて布施をしや  
うと思へばいづれの善知識もこれに應せぬ方  
はなかろう、私等は別に行かなくともよいの  
である、殊に此頃は平相國奢侈にふけつてお  
ると云ふことである、そんなものゝ供養を受け  
けなば、却つて罪を増すやうなものである」と云はれたとある。

ラゴラ 羅睺羅

【人名】

羅尊の王子なり、七歳の時出家し、佛弟子となれり

ラクサイ ラゴラ

一七五

羅曇羅尊者は釋尊の御子であります、初め釋尊が悉達太子でござりた頃に父の淨飯大王に向つて出家の義を御願なされたら、大王の仰せらるゝに、「耶修多羅女に一子あるならば汝の望み通りにすべし」とあれば、太子は耶修多羅女の腹を指して、劫後六年當生男子となされた、それより太子は檀特山に入りて修行なされたのであるが、果して耶修多羅女は次第に身が重くなり五年六年も歷たれば、これは太子の御子ではあるまいなど、惡評が傳はりた、これは無理のないことであるが、耶修多羅女は大になげき、父なし子を生んだと云はれては、太子の御名もけがれ我身の耻辱である、生きて耻をさらすより寧ろ死ぬべし

である、なせ六年も胎内にござりたかと云ふと、皆宿業のなす所である、即ちこの羅曇羅は前生に大王ご生れて衆僧を供養するにて、數多の僧を招きておきながら、宮中の娛樂にまぎれて、出家を招きたことを打忘れ、一日の間、出家に食物を與へ玉はず、大衆を苦しめた報ひで、六年の間だ胎内に住して御難義をなされたことある、これらは恶心でなされたことではなけれども、善惡應報因果必然の道理で、かくのごとき報ひを受けられたのである、又耶修多羅女が六年の間腹に子を持つて居られたのにも二義ありて、一に前生櫛箱の引出へ鼠の這入りたを知らずに蓋をして、六時間苦しめた報ひで、前生の六時間がこの現生で六年の報ひと相成りたとある、二に此耶

羅曇羅尊者は貧乏なる家に生れ、一人の母を養ふて居られたが牛の乳をしばる賃仕事を行なされたのであるが、果して耶修多羅女は次第に身が重くなり五年六年も歷たれば、これは太子の御子ではあるまいなど、惡評が傳はりた、これは無理のないことであるが、耶修多羅女は大になげき、父なし子を生んだと云はれては、太子の御名もけがれ我身の耻辱である、生きて耻をさらすより寧ろ死ぬべし

と覺悟したまひ、御殿の庭に澤山に柴を積み其上に上らせられて「サア柴に火をつけよ」と云はれた故、止むを得ず松明を以て四方より火をつけたれば、其柴一面に火炎となり、天を焦してもね上がる、アハヤを見る中に、其火の中から青蓮華があらはれて、耶修多羅女を上へのせて、炎が一丈あかれれば蓮華が三丈のびる、山のやうに積んだ柴が燃り終りても、耶修多羅女の袖一つもこげもせず、焼けもせず、火の中に安産なされ、眞黒な烟の中より産聲高らかに御誕生なされたが、今申す羅曇羅尊者

いものをのせ、山坂を下られる、耶修多羅女は萱や薄の間から後ろ影を見て、さても氣味のよいこぢや、あれで思ひ知らるゝである。うど、母親の六町もあるかるゝ間に後ろから詠めて居られた、其六町重荷を持たせられた報ひが、後世轉劇と云ふて、六年の間重い腹をかゝへて難儀をなされたとある、これが現に不孝の報ひの顯はれぢや、この二つの理由によりて、耶修多羅女は六年の間胎内に子を持ちて苦まれたのである。

## ライコウ 来迎

【術語】

臨終現前の願に應じ、臨終に阿彌陀佛の來現して極樂へ引接したまふを云ふ、

## 因縁 親鸞聖人ご来迎不來迎

親鸞聖人、稻田に於て御化導の砌り、或同

行が御尋ね申す様、「私は來迎不來迎のことがどうもしつかりと領解が出來兼ますから、どうか明晚私方へ御足勞下されて來迎不來迎の義を委しく御教化下されたい」と願ふたれば聖人も快く御承知になりました、さて其翌晩になりて多くの同行がより集り、今や聖人の御出があるかと待ちかまへておられたら、其晩に限りて御越しがない、待てどもく御相がみぬぬへ、一人の同行が御迎ひにゆきましたので、漸く御出なされた、それから長々と御教化なされたが、肝心の不來迎のことは一つも仰せられぬ、故に御勧化が終りてから御尋申したら、仰せに、來迎と云ふはおれの來るのがおそいへ、迎ひにおこした様なもの、諸行の人は往生が定らぬで迎ひに來

玉ふ、不來迎とは早くから參り人には迎ひは入るまい、念佛の行者は一念の時に攝取の光明におさめられて居るゆへ、御迎ひに及ばぬと仰せられたとある、まことに機宜に應じたる御教化ではありますんか。

## 因縁

源太夫の改心

讀岐國に源太夫と云ふ惡逆無道なる士がありて、常に人を切り殺すを何とも思はず、亂暴を極めて居たが、或時觀音堂に同行より集り、有徳の僧を招待して說法を聽聞して居たが、其處へ源太夫がかけこんだゆへ、同行は皆逃げ去りて仕舞ふた、說法をして居た僧が一人あとに残りておりたが、源太夫は刀を抜き放ち、將に其僧を殺そうと致しましたが、僧は暫く御待ち下されよと云ふて、それより

阿彌陀の本願の尊きことを段々と御説きなされたれば、忽ち宿善開發して、深く佛教に歸し刀をなげて、馬に乗り、西方へへと走られた、家來どもは跡を追ひかけて、これ檀那様ドーボ自邸へ御歸り下されよと云へば、我向ふて念佛申せば、一聲々々に阿彌陀様が御返事なされて、サア來いよ／＼と仰る、これがどうして我家へかへられうものぞと云ふて、西へへと一散に駆け行けば、もはや四國の西の端までいたりたゆへ詮方なく海へざんぶりと飛びこまれたれば、紫雲たなびき音楽の聲ありて來迎引接の奇瑞があらはれたとある。

## ライシユンスイ

賴春水

【人名】

藝州侯の儒官なり、名は惟寛、字は千秋、春水は其號安藝竹原の人なり、文化十三年二月歿す、年七十一、

### 火議 賴春水の廉潔

賴春水と云ふ人は何事にでも勤勉であつて文人疎懶の風習はなかつた、家内を治むるに器具をキチンと片付け、帳簿なども明晰にして、無用の故紙でも綺麗に整へて決してす、儉素を主とし、些細なことち苟にするといふことはなかつたのであるが、此等儉約家が往々にして陥り易い吝嗇ごいふ弊は寸毫もなく、つとめて故舊を撫し、貧困者を恤んだのである、氏が死ぬる二三年前のことであつたが或る門人に手紙を出して、「我が亡後にこれを抜け」とあつたので、後になつて抜いて見れば、具さに死後の事を處分してあつた

「二本の刀と一本の槍は家の舊物である、藏書は我が若いときから辨じておいたもので、我が膏血であるから、子孫たるものにはこれを愛護せんければならぬ、他の物は惜むところはない、又廉潔の二字は我が家の精神である吾が死んだ後、眷族の者で汚名を得ると、即ち祖徳を汚すのである、この外には別に心配することはない、また某の物を借りたのは返し、買ったものは値を拂はんければならぬと記して渡す所はなかりたとある。」

### ライサンヨウ 賴山陽

名は堯、字は子成、久太郎と稱す、山陽は其號なり、安藝の人にして儒者なり、日本外史日本政記等の著あり、天保三年九月歿す、年五十三。

### 談議 賴山陽の抱負

山陽は幼い時から已に群童に拔んで居た

が、六歳の時、突然母親に、天は如何なるものであるかと問ふたので、母は「旋轉つて彼の通り止まないものである」と答へた、スルト山陽は遽に庭に走り出て、天を仰いで歎じていふには、「實に不思議千萬なものである」と、半時間ばかりも啼泣たといふことである八九歳の頃から非常に讀書を好み、特に平家物語、太平記等の諸書を喜んで熟讀したのである、そして苟にも嬉戯れる時には土を築いて城攻の状を爲して、讀書外の樂みとした、十三歳の頃には、通鑑綱目を読み、活眼を開いて治亂の大勢を達觀したのである、一日、書物を曝して、東坡の史論を見ていふには、「天地間に此のような喜ぶべき好文章はあるまい」と、これから文章に力を入れ殊に史學

に眼を注いたのであるが、惟ふに後年歴史の著は實に此の時に萌ざしたのである、嘗て、文を作り自ら警めて云ふには、  
男子學ばんば則ち止む、學ばよ宜しく  
群に越ゆべし古の聖賢豪傑伊傳の如き、  
周召の如き、亦一男兒のみ、我れ東海千  
歳の下に生るゝと雖とも、生れて幸に男  
兒たり、又儒生たり、安ぞ奮發志を立て、以て國恩に答へ、以て父母を顯はさ  
いるべけんや、噫汝之を擇へ、同じく天下に立ち此民たり汝凡庸に群せんか、抑  
も亦古の聖賢豪傑に群せんか。  
これを以て見ても、山陽が壯年に於て如何に抱負の大なるかを知るに足るであろう。

### 談議 賴山陽の孝行

山陽の孝心深いことも常人の遠く及ばんところである、文化十三年二月、山陽が京都で莊子を講義して居た時、父の春水が廣島で病危篤であるとの飛報があつたので、山陽は直ちに書を投げて起ち、晝夜兼行で廣島に到つたが、父春水は既に死去した後であつたので山陽の慟哭みは一通りでなく父の喪にをることが三年、其の間常に喪服を着て、酒肉をも食はず、宴會にも赴かず、ソシラ終身再び莊子を講じなかつたといふ、山陽は父の臨終に遭はないのを遺憾に思ひ、母に事へるには最も勤めたのである、文政二年、母を廣島から迎へて、共に諸所を遊覧したが、この年の春には芳野山に遊んだとき、滿山凡べて櫻樹爛漫として、彩花は雲の如く又霞の如く、實に

云ふにいはれぬ景色であるので、母は大に喜んで、我は非常に満足した」といはれるど、山陽も亦大に悦んで、「母様のこの御言葉を聞くのは宰相になるのよりも優つて居る」といつたといふ、其後毎年、廣島に歸省することは一度も欠かさなかつたが、後、京都に邸宅を構へることになつてからは、母を迎へて厚く孝養したと云ふことである、山陽は家を修むるには極めて儉素であつたが母を迎へてからは、朝夕母を歎ばすことばかりに骨折つたといふことである、學德兼備の學者とは、山陽の如きを云ふのであらう。

リ之部

リキウ

# 利休

人名

火  
華  
集  
目  
次

愚齋  
な

穴

三

卷之六

१८

二〇

九  
二

二、  
詩

卷之三

七  
清

前記

上に  
あな

卷之三

七八

2

100

10

四

十一

ちたことゆへ、取敢へず湯あみして、再び行  
きますと、人々の興として大に笑ふたこの事  
かねて期明ご云ふ者から聞いて居たので山科  
へおはさばかくと早く我に物語りたれど主人  
の心づかひを我かねて知りたと云ふて、穴に  
落ちなんだならば志を空しくすることの本  
意なきに穴ご知りつゝ落ち入ったのちや、そ  
れでこそ其日の興とはなりたのちや茶は只管  
に詣ふこにはあらねども賓主とも應せざれば  
茶の道ではないと語りたる由、穴なりと知り  
つゝ主人の意を空ふせじとて、其中に落ち入  
りて興を添へたる利休のやさしき心根は實に  
敬服の外は御座りませぬ。

和休と豊太閤  
天正十八年、秀吉南禪寺より黒谷へ出らる

山際の道にて、女房の下部にわりご持たせらるが、絶世の美人であつたので、段々と尋ね先はらひの者を見て花の木蔭に立ちかくれたるゝと、利休が女にてもす屋に嫁し、今は一人住居なる由を聞いて、官仕へさせよと強ひて呼び出されしに、夫に別れて後悲みの涙かわかすとて從はず、利休に強ひられしに、娘をあきなひしたりと人に云はれんが口惜しこて出さず、秀吉大に利休を惜み、天正十九年の二月に遂に利休を誅せられたのである、利休小座敷に茶の湯をしかけ弟子の宗嚴と常の如く茶の湯終りて、それく見を見を分ちやりて、後に自害せられたのである、利休の如きは勢利の爲めに屈せず、死を知つて從容せま

らざるの態度は、實に奥ゆかしきの極みと云ふべきである。

### 逸話 朝顔の茶の湯

或時、利休が家に朝顔の茶の湯と云ふことがあつた、これは利休が庭に朝顔を夥しくうへて、離にはわせ、盛りになれば殊の外見事である、其事を秀吉公は御聞になり、朝茶の湯に御出あるべきよし仰せ出されたから利休は畏つて御請を申した、さて翌日早朝御出あつて庭を御覧になりしに、離には朝顔の蔓ばかりで花は一輪もなし、ことぐくもぎしてたる體である、これには定めて仔細のあることであろうと思ふて茶室に入つて見玉ふに、床に朝顔が一輪いけてある、此時に秀吉公大に御満悦あつて、褒美したまふたである

これは澤山あるものは御馳走にならず、大切な處を賞翫するのであるから、態と庭前との花をもぎたり床の間には一輪だけを残されたものであります。

### 逸話 利休の茶杓

利休が山科の茶屋に休んで其家の檐の桜竹を見て、茶杓に作るによき竹なりと見立て其家を買ひ取り、唯一本の竹、わづか五六寸にたらぬ程取つて茶杓をこしらへたと云ふことがある、わづか五六寸の茶杓をこる爲めに家を一軒買ひ求められたとは、あまり事を好んだやうにあれど、名人のせらるゝことは亦格別なものである。

### リケン 利劍

快利なる名劍を以て敵を斬る如く名號を以て煩惱を退

### 因縁 新見源六郎の決定心

徳川家康の家來に新見源六郎と云ふ人がありたが、或時朱鎧を作りたゆへに、朋友が分限を知らぬ奴と罵り笑ひ去したが、源六郎は心に期する所がありたと見ね、或處の戦に果して敵の大將の首をとりて來ました、家康が其決定覺悟の程を尋ねましたれば、彼は、「決定の信心に住して居れば死せば極樂、生命は君に捧げてござります」と答へたによりて、家康は大に感じ入り、布を取り出して、利劍即是彌陀名號と云ふ、般舟讚の八字を書き與られたとある、又蓮如上人は、この利

六道に牽く業障の綱をきる  
劍なりけり彌陀の名號

志を立てゝ勤むれば百事成り百福いたる、王陽明の語  
に「志立されば能なき舟磨なき馬の如し」とあり、

談叢 身體の矮小志氣を勵ます

英國の海軍に武名を輝かしたナルソンは、  
始め艦長の命を受けたとき、其の軍艦に行く  
と、埠頭に居る人々が皆嘲つて、「ドーして斯  
様な矮小者を艦長としたのであらう」と言ひ  
合ふのを聞いて、ナルソンは大いて此の言に  
脚ませれ、此の後、ナイル、トラファルガル  
等の戦争にもイツモ之を忘れたことはなく、  
終に芳名を千載の下に垂る程に成功したの  
である。

又英國の詩人ボーラーと云ふ人は身の丈低く  
且つ一方に曲つて甚だ醜かつたが、曾て自分  
に言ふには「吾は身體が曲つて醜いとも、詩  
は真直ぐで美しい」と。

又ハズリットがいふには、一世ナポレオン  
が後日になつて歐州を震動させたのは最初  
或人が「矮小な兵士」と云ふ綽號を與へたの  
で非常に奮闘したからであると、身體の大小  
好醜は決して人格の高下を規定するものでは  
ない、唯能く勉強すること否とにかつて成功さ  
れが分れるものである。

談叢 佐川田喜六と和歌

徳川幕府の老中永井尚政の家老に、佐川田

喜六と云ふ人があつた、この人は品行方正にして文武兩道に達し、とりわけ和歌を好むこそ深く、常に世にならびなき名歌をよみたしと心にかけて居られた、或時主人尚政、喜六を呼びて一首の和歌を書きつけたる扇面を示し、「コハ近代の名歌の由にて禁裡より下し賜はつたものなりとて將軍家より拜領せり」といひて喜六に見せた、喜六・推したいといいて之を見るに、

吉野山、花待つ頃の朝なく

心にかかる峯の白雲

があるので、喜六おもはず涙を流して云ふやう、「こはやつがれのよみたる者にて、先づ上方へのぼせましたのを、畏きあたりの御目にふれさせたまふことの難有さよ」と云ふた

歌話 一本亭芙蓉花の狂歌  
浪花に一本亭芙蓉花と云ふ狂歌師がありた  
繪馬をさゝげた、其表に自ら寶珠をゑがきて  
上に左の狂歌を添へた、磨いたら磨いたりに光るなり  
性根玉でも何の玉でも  
精神一到何事不<sup>レ</sup>成であるから、勉強により  
て心の玉を磨かねばなりませぬ。

**格言** 志立たされば舵なき舟  
轡なき馬の如し

人の精神は彈力性のものにして、外より壓すれば必ず彈返さんとする勢ひのあるものである、若し彈返す力なきものは死物同様であるから聖人も手を下すことは出来ぬ、佛は「縁なき衆生は度し難し」と云はれたが、人にして志なきものは矢張濟度することは難い、斯くの如く、立志は精神中に内包せる一種の勇氣の、事に觸れ物に應じて外へ發したるものごみてよろしい、この立志には、いろいろの區別がある、例せば伊藤仁齋が十七歳の時江州三井寺に登り琵琶湖を望み見て、男兒空く死するなけれ

大なる哉神禹の功

といへる詩を作りて大に志を立てられ、後に身成功の爲めに立志したるもの個人的と云ふのです、又、嘉永六年に亞米利加の黒船が日本に來りし爲めに、國民中氣概あり先見ある如きは國家的に申してよい、又、ワーレンしたるが如き經國濟民の目的に向つて立志せられたる田園が昔は己れの家の領地なりしをきゝ、ヘスチング氏が野外に遊び遠近數里にわたれる如きは國家的に申してよい、又、ワーレン族的です、又釋尊が十九歳の時、人の生老病死の爲めに迷へるを見て、其苦を除く道を求める如きは、一身めんとして、出家入山せられたる如きは、一身一家の爲めにあらず、又一國の爲めにあらず

ひろく人類社會即ち一切衆生の爲めなれば、社會的ご申してもよかろう。

### リハダ

離婆りは

【羅漢】

室星を譯す、父母星に祈りて得なる子なるが故に此名

あり、無倒亂第一とす、

### 因縁

離婆多尊者の發心

離婆多と云ふは天竺の言で、唐に譯すれば假合とも常作聲とも云ふ、大經に尊者大號であるはこの人のことである、この人は異りたことをなさるので、いつも市町を歩みて、大號とも云ふ、なせに其様なことを云ふて歩聲を發して叫びあるかれたゆへ、常作聲とも「此體は人の體かおれの體か」と云ふて、大號とも云ふて、もどこの離婆多の御出家なされたかと云ふて、なせに其様なことを云ふて歩かれたかと云ふて、もどこの離婆多の御出家なされぬ前は他國通ひの商人でありたが、或

の死骸なれば、是非とも一鬼の食ふがたらぬもしや我身も見付けられたなら一鬼の食ふならねばならぬと息をつめて居らるゝと、小鬼が大鬼に向ふて云ひけるに、「如何に汝は體は此方が取り來りたことは、彼の梁の上に身大なればとて斯く無理を云ふ、もとこの死體は誰が取り來りたか居る人が知りて居るぞ」と云へば、それを離居る人が知りて居るぞ」と云へば、それを離婆多尊者はさくなり、身ふるひして、大小二鬼の争ふて居る處へ落たれば、大鬼が忽ち首筋をおさへ「汝は宵からこゝに居るか、此死體は誰が取り來りたのぢや、明かに云へ」と申すゆへ、離婆多心に思はるゝやう、所詮虛言を云ふても殺さるゝ、虚言を云はずとも殺さるゝ、詮する處死をまぬかるゝことはならぬ、然らば詮りを云ふべからずと思ひ、答へ

らるゝには、「最前から争ひを聞いて居りましたが、大鬼殿が無理でござります、これは小鬼が宵に取り來られた、私が能く見ておりました」云ひ、直に離婆多の左の足をグット引き抜き、「汝斯く云へば此方が今宵の食物がない」と云ひ、大根を食ふ如く食ひ終りて忽ち大鬼の形見に力あるものに味方をして弱いものにはつかぬし、そこで離婆多氣を失ひ、死に入る如く苦しみ居られたれば、小鬼が側へ來り、「さても云ひ、汝は正直なものぢや、凡そ世間の習ひは習ひちやに、汝が眞を云ふてくれたゆへ、我ら汝も片足がなくては忽ち難儀であろう」と云ふて、件の女の死骸の足を引きぬき、離婆

多の不足せる處へ足すと、鬼の妙術で生れついたる足の如く癒へあふた、しかしあるいてみれば足に长短大小はあれども、やはり生れつきたる通りぢや、それより小鬼もついに消ぬ失せた、其跡で離婆多つくゞと思ひ回らして見れば、我れ生れついた足は大鬼の爲めに食はれてしまい、今この片足は何國の誰の足やらしらねども小鬼の爲めにこの様につぎ合ふたゆへ、やつぱり己れが足ぢや、人の足を假りに名けて我が足と云ふのか、實を云へば足ばかりではない、身體もこの通りぢや、然るに我等は假物の身體の食ふことや着ることにのみかゝりはてゝ、此様な辛苦に値ふて苦勞すると思へば思ふ程、むだ骨折と云ふものぢやと、これより菩提の道に入り、釋迦如

## 因縁

牛盜人の因縁

來の御弟子となり、終に阿羅漢のさとりを開かれたのである。

離婆多尊者が山中にありて袈裟を染めようと思召して、木蘭樹と云ふ木の皮をけづりて鍋へ入れて煎じ出して御座りた、現今僧侶は袈裟や衣に紋や模様を好み、衣屋に注文して美麗なるを着用すれば、佛在世の御弟子方は染めるのからが皆手染めになされたものである、今も離婆多尊者は袈裟を手染めにせずとて用意をせられたのでありた、處がそこへ一人の百姓が来て云ふには「此山の麓に牛を放ちて草を喰はせておいたが、其牛が見ぬ、其方が盗んだのであろう、戻せ、もし戻さずばこのまゝではおかぬ」と罵り呵責す

る、時に離婆多は一言も返答せず、顔赤らめて泣いて御座りた、すると百姓は泣いて居てはすまぬ、定めてたゞ殺して食ふて仕舞ふたのであろう、其鍋が牛の肉であろうと云ふて蓋を取りてみたれば、離婆多前生の業のあらはれにや、鍋の中の木蘭樹の皮がござぐく牛の肉とあらはれ、煎じ汁が牛の血鹽となり、染めようと思召した袈裟は牛の皮となり鐵鉢が牛の頭とあらはれた、さてこそ殺して仕舞たか、坊主のあるまじき事、此義を代官所へ申上ると云ふて、離婆多を引き連れ行ひた、其跡へ離婆多尊者の御弟子方が、他より歸らるゝと、御師匠は何國へ行かれたやら、行き先がしれぬと、種々御尋ねなされたが、丁度十二年の間居所が知れぬ、然るに其間に

はされたれば、大王は大におどろき、「勿體なやりて通力をおこして見玉へば、離婆多尊者は鷄賓國の牢屋の中で責められて居らるゝ、そこで急ひで鷄賓國の王へ御願ひ申して、「私の御師匠阿羅漢の聖者、何の罪で牢獄へ御入りなされたぞ。何卒御赦免下さるやうに」と願はれて、王宮より牢屋までは遙かな道を隔て、左様な貴い御方を、何故にながく牢屋のにおいたぞ、急いで放ち赦せよ」と仰せらるゝと、王宮より牢屋までは遙かな道を隔て、あれど、其御言が出ると離婆多尊者は神通を現じ、小さい形を現じて牢獄の窓より出られ虚空を歩み大王の御殿の前へ下り、大身を現じて虚空に満ち、或は倒さまに虚空に立ち、頭の上から火を出し、足の下より水を出し、

右の脇から火を出し、左の脇から水を出し、十八の神變を現じて御見せなされた、大王は御殿より下りて恭敬禮拜をなされ、「此様な神通自在の聖者、何故無實の咎を受け十二年の間牢獄の中に御座りたぞ」と御尋なされたれば、尊者の答に、「是皆前生の業報でござる、前生百姓でありた時牛を失ふて辟支佛の聖者を疑ひ、彼のが盜んだであろうと云ふて晝夜十二時間責めた、其十二時が今十二年と顯れて牢獄の中で苦んだ」との玉ふたとある。

## リヨウギ

了義

【人名】

近江興禪寺の僧にして字は海岸、阿波の人なり、大燈國師の下に參究して功あり、  
海岸了義禪師は大德寺開基大燈國師の弟子

## 談議

了義禪師の守節

## リヨウギ

。

である、國師は後醍醐天皇の寵信を蒙つて居られたが南北朝分立の後に至つて、足利尊氏等は禮を厚くして招聘されども趣かず、常に吉野に信を通じて節を守ること堅し、或時弟子海岸了義を使僧として、南朝の天子に通信を致しましたが、足利氏の吏輩これを探聞し途中に要して甘言慰諭していふやう、大燈國師の徒たらんよりは夢窓國師の徒となれ、されば一命を助くるのみならず厚く待遇せんもしこれを聞かぬならげ汝の首を取るぞ云々（夢窓國師はこの時已に北朝の御歸依僧として歎を南朝に通するが如きことなかりしを以て吏輩斯の如く勸誘したのである）、其時了義のいふやう、「師となり弟子となるは宗門の一大事、汝等俗吏の知る所でない、此禪師を

## リヨウクワン リヨウゲ

要するならば速かに斬れ、復汝等と言を交ゆるの用はない」と云ふて、泰然として白刃を受け入寂せられたとある。

**リヨウクワン** 良寛

越後國上山の人にして曹洞宗の奇僧なり、名は良寛、字は大愚と云ふ、天保二年正月寂す、壽七十四、

**逸話** 良寛と竹  
禪門の大徳に良寛と云ふ人あり、性頗る竹を好み庵の前後にこれを植られましたが、或年筍が床の下に生へてのびることが出来ぬ良寛あはれに思ふて、直に床を撤して屋根を毀ち、これを長せしめたとある、世人之を賞賛して「昔の高僧は德禽獸に及び、今の良寛は德筍に及ぶ」と云ふたとある。

**俳話**

良寛と米五合

越後の良寛上人、遁世して自ら五合庵と稱し、市中を托鉢して米五合を得れば歸りて其餘を求めず、或人其苦行を慰めたるに、住なれてこそも盧山の夜の雨と云ひすてられたとある。

**リヨウゲ** 領解

師長より教を領納し心中の不審を解き放すを云ふ、法華經科註に「領解ハ自陳之文」さあり。

**譬喻** 火の用心

先年京都に大火事がありて、其後に毎晩二軒三軒づゝの火事がある、それで役所より嚴しく火の用心を申付け、其模様を各町内から云ふて出させた、すると各町内の火用心の趣向がいろいろになつて居る、町内に水をかこひ不寢の番をするとか、或は一時間毎に太鼓

止までは餘所へはゆかれぬ、不信心の門口に立つて居るぞと御深切に御すゝめ下されたが八十通の御文の御勸化と申すものである。

**リヨウゼツ** 兩舌

〔術語〕

十惡の隨一なり、又は離間語さも云ふ、大藏法數に向つて此二説キ是ト向フテ彼ニ説ク非トさあり

**談叢**

夫人鄭袁の兩舌

内のものがごつくりと釜戸を見まわり、いかにも火の用心はよろしうござりますと返事をすれば次の家へうつる、もし返事のなひ家はジット待つて居て返事をきかねば次の家へうつらぬと定めました」と申上たれば、火の用心の仕様はそれ程よいことはないと御賞めにあづかつたと云ふ話がある、今も其如く無常の火の手はあがり通し、何時この身體に火がつくやら知れぬ身ぢやで、蓮如上人の御教化は、懈怠がちの我等が門口をたゞいて、しかど領解が出来たかどうぢや、決定信の得らる

魏の國王が楚王に美人を送りた、楚王は深くこれを愛し、又楚王の夫人鄭袁も常に姉妹の如く親しくして居たものゆへ、王も夫人の妬まざるを喜び、美人も亦鄭袁の親切を喜び居りしに、或時婦人が美人に申すには、「王様が其許の鼻の醜を嫌ひ玉ふゆへ、今日より王に見ゆる毎に袖を以て鼻を掩いたまへ」と云ひしかば、美人も平生親切にして下さる婦

## リヨウチン

一七六

人のことゆへ、夫人の申さるゝ如くにして王に見ねた、處が王は甚だ其行爲を不審に思ひそのゆはれを夫人に問ふ、夫人曰く、彼は君の口の臭を嫌ふと、王大に怒りて鼻を碎きて之を殺されたとある、此夫人は知識を害用して、兩舌をつかい、嫉妬の念を晴らしたので、外面如菩薩内心如夜叉の本音をあらはしたのである。

### 談叢 矛と楯

矛と楯とを賣る人がありました、其盾の堅きを譽めて「我が賣る所の楯は頗る堅ければ物として能く此楯を陥るものなし」とて又我が賣る所の矛を譽めて「我が賣る所の矛は利るゝこと驚くべきにて物として陥らざるなし」と、人之れに問て曰く、「汝が賣る所の矛

を以て汝が賣る所の楯をつかば如何」と云ひたれば、其人應すること能はず、これは韓非子に出ておる話で、矛盾と云ふ熟字の始りです。

### リヨウチン 了然

【人名】

了然尼は武田信玄の玄孫、初め東福門院に事へ、後、出家して尼となり、江戸に下りて牛島の弘福寺に至り、鐵牛の門に入らんとす。鐵牛其容色の美麗なるを見て魔魅なりとして入るを許さず、去つて駒込に白鷗（白翁）を訪ふ、又許さず、こゝに於て鐵を焼きて自ら我面に當て、眉額を焦爛し、鏡裡に書して

云ふ、

昔遊宮裡焼蘭麝今入禪林燎面皮  
四序ノ流行亦如レ此 不知誰是個中移  
いける世にして、おくみやうからまし  
つひにたきいと思はざりせば  
と、再び白鷗を訪ふ、鷗其志に感じ、室に  
入ることを許した。

### リヨウベン 良辨

【人名】

大和東大寺の開山なり、俗姓生國、詳かならず、相模さも云ひ又は近江志賀とも云ふ、日本華嚴宗の第二祖とす、寶龜四年十一月入寂、壽八十五、

### 因縁

### 良辨僧正の母子再會

良辨僧正が鷲に攫まれたと云ふは、中々名高い因縁話である、僧正は、江州志賀郡の産れで、兩親が觀音に祈りてもうけられたのである、そのうな、其頃南都東大寺の義淵僧正と云

ぞと云ふ手がよりはない、千辛萬苦すること數十年の長日月でありたが、或時彼の老母が淀川の三十石の川船にて乗合の人々の話をきくに、南都東大寺の良辨と云ふ僧は三十あまりの人なれど、學問は千人に勝れ、天子様の師範と仰がれ、日本一の名僧ぢやげな、それが不思議なことには、幼少の頃に鷺につかまれたのを、義淵僧正に拾はれたのちやそうなと大聲にて話すのが老婆の耳に入り、さてこそ耳よりな話、我子も鷺につかまれ、別れてからは三十年、これではなひかと打ち喜び、直様南都へ向けて足を早めたが、丁度この老婆が南都へ着した日は、僧正が輿に召されて春日神社へ御参詣の日でありた、老婆は群衆の中をおしわけて輿の側へ進みより、「恐れ乍ら

暫し御待ち下され、私は江州志賀の里のものと云ふを冒頭にして、三十年の苦心の経歴を逐一に語りた、僧正きかせられて「それには何か證據があるか」と仰せられた、老婆答ふことを常に悲み、觀音様に祈誓をかけてもう涙き沈む、これを聞くなり僧正は輿より飛び下りたまひ涙を拭ふて仰せらるゝやう、「御師匠義淵僧正の常々の御言に、汝を拾ひし時に首にかけて居たはこの大悲觀音の尊像なればこの像を實の母と思ひ日夜に祈念せば、實の母にあはることもあるうとの御一言が、今

に耳の底に残りてある、これと云ふも偏に大悲觀音の御ひき合せなり」とて、懷中より彼の像を取り出して老母に見せ、遂に母子再會せられたと云ふことが、本朝高僧傳に残してある今はたゞ其梗概を簡短に申のべたのである

## リンコルン

〔人名〕

北米合衆國十六代の大統領なり、紀元一八〇九年に生れ、初め一商店に奉公せしが、苦學精勤後國會議員となり、千八百五十四年奴隸問題起るに及び奴隸廢止論者として大いに名聲を博し、千八百六十年大統領に選ばれ一八六四年再選せられ、幾ばくも暗殺せらるる馬車は鞭をあげて走るといへども、憐れり

## 談叢

## リンコルンの貧乏

リンコルン氏は亞米利加の大統領にまで成上つた人であるが、まだ志を得ず、田舎で辯護士をしたりし時分、一夕遠方より家に歸る途中、大に疲勞を覺えて足が進まぬ、往來の馬車は鞭をあげて走るといへども、憐れり

リンコルンは臺中無一文で、走れる馬車を横目に見て只羨む計りであつたが、忽ち一策を考へ出し、手を擧げて馬車を叫止め、ツト乗込み、其中に居る一紳士に向ひ、一禮して曰く余は地方の一貧士である、今無禮を顧みずして、君に願ひたきことあり、他にあらず、余が外套を余が村里まで携へ往き賜はずやと、リンコルン答て曰く、余豈寒氣を恐れんや、余は即ち君に托して行く、其外套の中に居る彼の紳士もリンコルンが、淡泊にして面白き積りであると、車中皆之を聞いて大に笑ふた、人物と思ひて快く之を承諾して、されば御預

り申さんご、リンコルンを車中に引乗せ、いろく話をなしつゝ遂に無二の親友となつたことである、リンコルンも中々の貧乏であつたとみゆる。

**談議** リンコルンの涙赦免状を潤す  
米國に於ける南北戦争の最中に、一人の兵卒が軍律に犯して死刑に處せられんとしたので、其妻は悲歎に堪へず、如何にもして夫を救はうと、殆ど狂氣のやうになり、赤子を抱いて、大統領リンコルンの館前に至り哀を乞はうと思つたが、當時は公私用務が繁く、大統領の面謁を請ふものが、日夜門前に市をなしたので、三日三夜立續けたが、更に間を得ない、ソシテ一方には、夫の死刑も愈々迫つて來るので、心はいよ／＼あせるから、四

日目の夜になつて、案内も待たず、窓に戸を開けて館内に入り、或る一室に控へた、リンコルンは其れとは知らず、劇務の疲を慰めるため、暫時庭園を逍遙せんと、廊下を傳ふて出て來ると、呱々と乳兒の啼く聲がするので不審の餘り、僕を呼んで何物であるかと尋ねさせると、かく／＼の次第であると、哀訴の件を聞いたので、慈愛の念禁する能はず、遂に自分で筆を取り、赦免状を認めて之に與ひられたが、涙痕斑々と紙面に點し、満幅皆湿ふて居たといふことである。

### リンジウ 臨終

【術語】

一期の壽命盡きて將に死せんとする時を云ふ、  
歌 拂へども通につもる雪の酒  
しめみてさめる年の暮かな

よいは／＼で呑んだのが、大晦日になると何拾圓の酒代を請求せられ、こんなことなら飲まなんだらよかつたにと、醉が一時にさめてしまふと云ふ歌の意ぢや、わづか一年の終りでさへ、この多いものぢや、まして五十年の婆婆の終りの臨終ぢやもの、悔懼こもごも至るで、それは／＼非常に苦まねばならぬぞや、其場になつてから泣いても悔んでも致方はないから、「いのちの中に不審もとく／＼はれられ候はでは定めて後悔のみにて候はんするぞ、御心得あるべく候」と仰せられてある。

歌 嫁入りの門出にしばる母の袖  
これは人情の機微を穿ちたる歌である、我

句 本降りになりて出て行く雨宿り  
家の娘を嫁にやる時は、母は涙をこぼして泣く、今日は長い間育てた娘に、別れねばならぬことかと思へば悲しいけれども、又其中にうれしい喜びもある、どうで一度は片付けねばならぬのに、幸ひ向ふは財産は豊なり、婿は善き人なりと思へばうれしい、うれしさと娘を嫁入させる時の母の心であると云ふ、歌悲しさが一時に胸の中にわき出ると云ふが今行くと思へば、悲しさの涙のこぼれるは最もなれど、其中から後生無量壽佛國快樂無極の樂みを思へば、心もぞく／＼する程の樂みがある。

この句の意は、山道野道を行く中に俄に雨が降り出した、俄かの事ゆへ雨具の用意はなし、足に任して野中の一つ家へかけこんで、雨のやむを待つて居た所が、西の方が明るくなり、南の雲が切れた、其内々々と見合す中に、段々降りが強く成りて来て、これはたまらぬ、傘買ふべき店もなし、とめてやろうの宿屋もなし、證方つきて、本降になりてから是非ないこと、出かける如く、未來と聞ては遠いこと、後生と云へば百年も末のことの様に、其内々々と見合せておくと、後悔しても取りかへしのならぬ場所が出来てくる程に、はやく油斷の目をさまして、信心決定せよとあるが平生業成の御勧めと申すものである。

## 譬喻

有明の行燈

有明の行燈に油が段々無くなつておい／＼と燈火が細り、其燈火がこんと仕舞には、パツト明るうなつてからビツシヤリと消れて仕舞ふ如く、人間とても壽命の油が段々と減り行くに隨ふて元氣も次第に細つて来る、それなりにする／＼と死ぬかと思へば、サア息が燃んになつて強ふおこつて來るものぢや、けれどもそれが往生の障りにはならぬ、何であろうと定業逼つて息のきれる其時の彼の土へまいるので、臨終の善惡にかゝはらず、報土往生、ゆめ／＼疑ひない程に。

## 因縁

坂本の道心僧

有明の行燈

あつて偏に西方の往生を願はれたが、老後に及んで過去の業なれば如何なる病苦を受けて臨終正念を失ふまいものでもない、依て病死を待たでして往生が遂げたいと思ふて、日頃心安き同行をたのみ、一つの箱をこしらへて自ら其中へ入り、近江の湖の深みへ沈めてくれよと云ふた、そこで彼の棺を船に載せて湖水へ乗り出して水際に入ろうとせられた、併しながら臨終は大事なもので其期に臨んでみねばわからぬ、萬一心散亂して正念を失は永劫の大事を仕損するのちやに依て、萬一我が心が亂るゝならば、箱の中から繩を引く程に引き上ぐてくれよとて、箱の中から細き繩を出して、船端に結びつけ、其端に鈴をつけておかれた、やがて重錘をつけて彼の箱を

水底へ沈めたが、暫くすると例の繩を引かれた、それつといふて手繩上げて、どうで御座りましたと尋ねたら、イヤ平生思ふたとは違ふて、今はと云ふ時に臨むと、心が亂れて念佛が申されぬやうになる、まだ己の修行がたらぬのぢやと云ふて、それから再び山へ戻りさて此度はいよいよ仕おほせずばおくまいと又彼の船に乗つて出かけた、今度も亦前の如くに沈めたが、暫くすると船端の鈴が、がら／＼と鳴つた、それつと云ふので又引上げて如何でござると尋ねたら、イヤ中々臨終に向ふて容易なものではない、併し後生の一大事なれば、どこ／＼までも仕おほせねばならぬと云ふて、それから又山へ戻り晝夜不斷に心

を練りて念佛しておられたが、又例の同行をたのまれた、同行も再三の事であるから今度も又無駄事ではござらぬかと云ふと、たゞひ幾度でも正念往生のなるまでは、無量劫かゝりても仕おほせにやならぬ事なれば、どうぞなさけちや世話をしてくれとたのまれたゆへ、

又も前の通りしたが又鈴がなつた、夫より又山へ戻つて修行を凝らし、四度目に猶又水底に沈められたが、今度は纏を引かれず、それざりであつた故、日頃の望みを達せられた者であろうと、送りた同行達が船をかへそ удо сеられたれば、忽ち比良ヶ嶽の上に紫雲棚びき、虚空に音樂が聞れ、正しく來迎引接の相を拜み、一同に喜んでかへられたと云ふことが「山海里」に出てある、今の道心者は首尾

よく正念を期せられたが、其外には臨終正念を待つて仕損じた方も澤山ある。  
因縁 陳善院僧樸と長谷の大徳チンゼンイ  
シリウボクの下をみよ。

## ル之部

## ルーテル

〔人名〕

獨逸の人なり、宗教改革者を以て名著はある。

逸話 ルーテルの確信  
マルテル、ルーテルの宗教改革を唱へて、ウォルムスに喚ばるゝや、人皆其身の厄きを云ひ之を止む、ルーテル平然としていふ、よし、ウォルムスの屋瓦が悉く惡魔と

なつて我を責むるとも、我歎して行かん、予は眞理の爲めに此説を唱ふ、これ神の命令なり、偽信の輩、何にかあらむ此勇あつて初めて彼の大事業は出來たのである。

## ルリ 瑞瑠

〔人名〕

備前の人、本姓は瀧氏、嫁して湯淺英の妻となる、寛保元年歿す、年七十二、

## 瑞瑠

〔人名〕

瑞瑠は二十八の時に湯淺英に嫁し、敬ひ事ふること君に事ふるが如くであつた、英は目附と云ふ役務を帶びてしばく江戸へ行きますれど瑞瑠は内に居て固く家を守つて居ました、英が年老ひて病にかかりました際には瑞瑠は衣を解かずして六年間一日の如く看護の

勞をとりました、英の死んだ後には、一子元禱を教育し、愛するにも姑息な愛し方は致しませぬ、過ちがあらば少しも假借せずして矯正し、恩威并べ行はれた、自分には家事に力をつくし、暇あれば、女史を読み和歌を詠するを無上の樂みとして居られたので、云はて七十二歳にして永眠せられたので、云はて平凡なる生涯で、あるこれぞと云ふ程に目立つて行為もなき様なれど、この平凡なる生涯の半面には非常なる苦心が存して居るのであると云ふことを忘れてはなりません。見ればたゞ何の苦もなき水鳥の

足にひまなき我が思ひかな  
とは、窗に徳川光圀卿のみならず、この瑞瑠の心中も亦この和歌の如くであろうと思はる

## レ之部

レイジヨウ 禮讓

自ら卑くして人を尊ぶ、人を先にして己れを後にする  
を云ふ。

談叢 可兒才藏の話

可兒才藏と云ふは福島正則の老臣にして武勇絶倫の人であります、或時、廣島城黒金門に居りました時、才藏は老年のことであるから疲勞にたへずして居眠りをして居りました、其處へ正則の近侍の士が名鷹一羽を携えて來まして云ふやう、「これは主君の愛鳥であ

るが、今貴殿に賜ふ」と云ふた、才藏あわてゝ服を正し、先づ本城に向ふて敬禮をなし、士道を知らぬのにも程がある、君命を達する時には大聲にて上意と呼び、先づ命を受けるものに謹聽せしめねばならぬ、其方は之をせぬものであるから、我は主君に禮を欠き其方は君威の重きを知らずこれから、以後、よく心得るがよからうと云ふたので近侍の士は、恐縮して去つたとある、正則之を聞き近侍の士に向ふて申すやう、汝法を知らざるの故を以て才藏の叱する所となる、固より其分なり、今藝備兩國の士をして悉くこの才藏の如きは上下尊卑の分を明かしたる禮儀の正しき人と云はねばなりません。

談叢 英国人の禮儀

先年英國女王陛下の大葬の時、陛下の柩車が、倫敦市中のハイドパークと名くる公園を通過するを聞き、市の内外より幾十萬となく早朝より其公園の中に集まり、恰も人の山を築き、波を漂はす程であつたと申すことぢや斯く雜沓を極めたることなれば、柩車の来るまでは、實に噪がしくありたるも、一たび、柩車の此に入るや、誰ありて、制するものも命するものもなきに、幾十萬の人々が、一時に火の消え風の歌みたるが如く、ヒツソリしてしまひ、唯車の轍のきしる響の外、森どして、何んの音も聞えざりしと云ふことであつた、我邦にて陛下の御通輦に、巡查が聲をからして制止するとは、殆んど雲泥の相違であ

る、其時列したる日本人は、皆英國民の禮儀正しきことには、深く感心したと云ふことぢや、君子國の國民たる日本人の赤面せざるを得ざることかと思ふ。

談叢 能因法師と名人の舊跡

能因法師、其友と共に車に乗りて道を行くに、忽ち車より下りて數町の間歩まれたので友人は怪みて其故を尋ねますと、法師の答へらるゝやう、今すぎた所は伊勢夫人の舊跡である、世を隔つることは遠いけれども、其御庭の松などは今に残つておる、名人のすまられた所だと思ふと、車に乗りて通りては恐れ入ると云はれたそうです、そして松の木の見れないやうになると再び車に乗られたとあ

## 略言喻

## 羊の川渡り

昔或る處に、二疋の羊が居つて一つの川を渡らうとしたが、其の川水は、華嚴の瀧の様に、何十丈あるか知れぬと云ふ程高い、斷崖絶壁のところに落ちて居た、ソシテ一つの橋が、其の瀧の上に架けてあつたので、二疋の羊は一時に東西から渡り始めたのである、そこで橋の中程に來るごと、ヒタリと衝當つて、互に押合つて居るうちに、遂に二疋共、斷崖絶壁の上から、直倒様に落ちてあはれにも紛微塵に撞けて死んで仕末つたといふ一つの話がある。

此の話は、何でもない事の様であるが、能く其の意味を詮索して見ると、實に深い道理を云ひ表はして居るのである、それは何である。

て勞はしくも土壇の上に引き据られた、太刀取は後ろにまわり、氷の劍をひらめかして罪の次第を具さに述べ、覺悟はよいかと振り上げた時、親鸞聖人に其所を通りかへらせられ一目御覽あそばすなり、土壇の上に飛び上り御自身の袈裟を脱いて宗重の首にかけ「暫く見込む所がありますから、拙僧に彼が一命を下され、懇ろに教訓を加へて發心出家を遂げさせ、御上へ御迷惑は決して相かけ申しませぬ」と、詞をつくして願はれたが、もとより徳の高い聖人の御願ひゆへ、奉行へ言上して遂に御聞濟となりたのである、聖人はそれより手許へ引取りて段々と御教化なされたゆへ、遂に無二の信者となり、出家して法名を

るかといふに、即ち吾々人類が我欲の念を退ふして、禮讓といふことを守らないために、遂に共々に不幸なる生涯を送らんければならぬといふ意味が含んで居るのである。

## レニイ 蓮位

【人名】

常陸三月寺の住持にして親鸞聖人の弟子なり、俗名は宗重兵庫頭と云ふ、多田滿仲の裔、三位頼政の孫なり

弘安元年七月寂す。

## 因縁

## 宗重の發心

蓮位坊は俗名を兵庫頭宗重と云ふて、清和天皇九代の後胤、源三位頼政公より五代の後でありた、關東下妻に居られし時、源賴重反謀を企て鎌倉に敵對するにつき、事露顯して其一族残らず斬られて取られたが宗重も其一人でありた、打首の嚴刑と定まり、白の單衣を着せられ白布を以て後ろ鉢巻き、顔を隠し

蓮位坊と賜はりた、蓮位坊は大に喜び、あの時に命終りたら、土壇の上から無間地獄へ沈まねばならぬのでありたが、危き難を救はれまだ其上に難有き法を聞かせてもらい、今生後生の命拾ひをしましたと喜ばれ、つもる御慈悲に重なる御恩、身を粉にして骨をくだいても報じあきはないごと、發心出家の其日よりも聖人へ常隨昵近、關東北國の御苦勞の時も笈を負ふて御供せられ、御臨終の今端まで御側さらずに御給仕なされたがこの蓮位坊である。

## 因縁

## 蓮位坊の夢想

建長八年丙辰、親鸞聖人八十四歳にならせ玉ふ春、聊か御不例にあらせらるゝにより、顯智坊蓮位坊の兩僧が御看病を申して居られ

## レンケツ

ましたが、蓮位坊曰く、貴方は聖人をば如何なる人と思ひ玉ふや、顯智坊答へて曰く、正しく如來の應現と思ひ侍るごと、されど蓮位坊はしみんく肯はざる體にて、されば我も或時はしか思ひ、或時は疑はしく見へ玉ふごともありと申されければ、顯智坊は茶をのみつゝ少し笑みを含んで、「遠からぬ内に實を知り玉はん」と云はれた、然るに二月九日の夜寅の時、蓮位坊の夢に聖德太子十六歳の御姿にて赤き衣の上に二十五條の御袈裟をかけさせられ、聖人の御前に跪きて、禮拜恭敬したまひ

敬禮大慈阿彌陀佛、爲妙教流通來生者、五濁惡時惡世界中、決定即得無上覺也、五唱へ玉ふた、蓮位坊は夢さめて後感涙といめかね、且つ顯智坊の先見に驚き入りたと獨り

一九〇

言せられたと云ふことです。

## レンケツ 廉潔

心たての潔きよきを云ふ、義理を先きにし、利益を後にするなり。

## 談叢 彌兵衛と三吉

伊賀國上柘植村の農民に彌兵衛と云ふが買ひて畑にせんごて堀り返したるにくさくつた、或時、同村の三吉と云ふものゝ宅地をの古金の入つた壺が出たので、彌兵衛は驚いて、村長に訴へ出て云ふやう、「私は土地は買ふたれど金は買ひませぬから、元の主へ返して下されと云ふた、村長やがて三吉を呼びて事の由を語ると、三吉亦頭をふりて「我は此地に金のあることを知らざれば、今更受くべきやうはない」と云ふ、ケ様に互に押し譲つてお

るものゆへ、領主の命で之を二つに分けさせた、されど彌兵衛は、半分の金を受けると云ふは、ごとも胸やすからずと云ふて、三吉の許にゆいて、この金は私から貴方に差上げるのですから……」と云ふて、残らず返してしまうたとある、心だての潔き人は格別なものである。

## レンケツ 蓮月

【人名】

太田垣傳右衛門の女なり、名は誠、尼となりて蓮月さんでおりました、彼の庵室の本尊は伏見人形の佛像であつた、或人が彼は金像や木像を買ふことが出来ないので土人形を拜んでおるの

であろうと思ふて、彼に黃金の佛を送りました、すると蓮月尼はこれをうけないでかう云ひました。

私は執着ふかいものなれば、この佛像にまで執着して眞の佛を忘れますので、七日に一回づゝこの佛をして、新しいのを購ふのであるから、さやうな貴き金佛はいりませぬ。

と、蓮如上人の「木像よりは繪像、繪像よりは名號」と仰せられた全く御意はこゝである

## レンニヨ 蓮如

【人名】

名は兼善、信證院蓮如と號す、本願寺第八世にして眞宗の中興なり、應永二十二年京都大谷に生れ、明暦八年三月、山科に寂す、壽八十五、明治十五年三月、惠燈大師の謹號を賜はる、

上人六歳の時、母君様が鹿の子の小袖を仕立させられ御着せになりました處が、大層御喜びで、踊り舞ひ遊ばして、

母御の手づから鹿の子の小袖

縫ふて仕立てゝいつかの間にや

わしは知らねど着せたまふ

うれしや踊ふ南無阿彌陀

尊や踊ふ母の恩

御歌ひあらせらるれば、母君様も御喜びの餘り、

彌陀の手づから六字の御名を

願ご行ごに仕立てあげ

わしは知らねどいつかの間にや

うれしや踊ふ南無阿彌陀

尊や踊ふ彌陀の恩

と和したまひ、直に書工を召して布袋丸様を御膝の上に抱かせられた御姿を寸分かわらぬやうに書かせられ、殊の外御満足に思召されたりあります。

### 因縁 母君の遺訓

其年の十二月二十八日の暮方に、母君は六

歳にならせらるゝ布袋丸様に向はせられ、「稚兒今母が云ふことを能く聞かれよ、亂世とは云ひながら、聖人の法流もたわぐになり實に殘念なことである、其方成人の後は真宗を再興し、昔にかわらぬやうに致されよ、これ一つが母の願ひ、母は爰に久しく居るべき身にもあらねば、其方が姿を書にかへせ、形見に持つて歸る程に、必ずく衆生化益に怠り玉ふな」と言ひ聞かせ涙もろさもに妻戸を

りたこの夢の御告、驚いて本堂へ参詣してみれば、御歸座ましますゆへに、歎びのあまり法施を捧げるので御座るが、爰に不思議なるは、觀音の御膝の上に稚兒の書姿を抱かせらるゝこの物語に、人々さてはど能々みれば、鹿の子の小袖を召し玉ひし布袋丸様の御姿でありたとあります、この母君の御遺訓が深く上人の肝に銘じまして、遂に中興の偉業を成功せられたのであります。

### 因縁 山法師の來襲

寛正二年が宗祖聖人の二百回忌に相當するので、大谷の本廟で御親修になりたが、朝廷よりは日華門を下渡された、斯く真宗の繁昌になりたことが形體にあらはれたものであるから、叡山僧徒の嫉妬の心を起すことにな

明けて外に出でたまひ、其儘御行衛知れ玉はす、布袋丸様は母君をしたひて泣き玉ふゆへ追々女中衆が出来て御様子を伺へば、始終を具に御物語りあそばしたので、俄に御本山は大騒動、更に御行衛がしれませぬ、然るに三日目の朝、誰云ふとなく御本山の御堂より石山寺の方へ紫雲が纏鑑てある、不思議な事と噂となり、存如上人御覧なされて、如何にも一筋の紫雲が江州の方へ引て居る、さてはと驚かせられ、人を以て尋ね玉へば、石山寺には一山の僧が打ち寄りて嚴重の御勤めの最中、何事ならんと尋ねれば、當山の本尊は日本無雙の靈像にてましますが、六年以前に衆生濟度の爲めに、人間に生るゝと御告ありてより御扉は開かざりしに、三日前に只今歸

りのたので、即ち寛正六年正月九日の夜、山法師等凡そ五百人、刀剣を横へ長槍を提げ不意に大谷の本廟を襲ふたのである、第一着に本堂に火をかけたものであるから、下間安藝の法眼は上人の手を取りて灰小屋の内に隠し奉り、御眞影様の御守護をなし、安藝法眼と下間如光の二人が必死になりて働いたゆへ、さすがの惡僧もあしらひかね、蓮如を尋ねて討取れど眼をくばれど、程よく隠してあるゆへ處はしれず、彼是する内、公儀の役人の來るを恐れて皆々立去りた様子のへ、上人を灰小屋より御出し申し、下間は御手を取り如光は御眞影を負ひ奉り、ひとまづ二條の屋敷へ御供致しましたこの逆縁が上人をして奮闘的布教をなさしむるの動機となりたのであ

る、實に塞翁が馬と同じ話で、日華門下げ渡しの大名譽が原因となりて大谷焼拂ひの悲劇を演じ、またこの逆縁が動機となりて、真宗再興の活動をなしたのであるから、所謂七轉び八起きで人生の事は實にはかりしられぬものであります。

## 因縁

蓮如上人と船頭

蓮如上人、文明三年四月上旬三井寺を辭して北國に趣玉はんとて、打出濱より舟にめざる、一人の船頭、老人なりけるが、毎度と尋玉ふ、老父對て、「私は親鸞聖人の御流を汲候」よし申せば、上人、東しの方を指し玉ひて「あの向ふに、見ゆる山は何と名るぞ」と尋玉ふ、老父對て「那こそ伊吹山を申して江

州一番の高山、さまく薬師生じ候一由を言し上れば、上人「老父あの山ほど金銀をやらふか其方か後生を賣か」と尋ね玉へば、船頭笑ふて「今をもしらぬ無常の命、あれほどのが金銀を持て何に仕らふぞ、今生こそかゝる貧賤き身にて候へどもやがて淨土に生れなば、身の樂なるべきものを存すれば、此世の事は物の數にてもなし、世の住みうきにつけてはいよ／＼御恩が思はれ候」と申しければ、上人、斜めならず御満足ありしとなり

因縁  
蓮如上人の御時代に庄左衛門と云ふ畫工がありましたが、或時上人の御前に出られました、上人の仰せに「庄左衛門よ鬼の畫をかいて予に示せ」を仰せられた、庄左衛門は、

「畏まりまして御座ります」と云ふて、即席に鬼の畫を書いて差上られた、上人は御覽なされて「ア、見事に出来上りたが、庄左衛門よ今一つ所望するが、佛様の御相をかけて予に示せよ」、「畏まりまして御座る」と云ふて佛様の御相を書いて差上た、上人に鬼の畫と左衛門よ其方に尋るが、鬼書いた筆を佛書いた筆と違ふかや」と仰せられた、「いわ／＼違ひませぬ、やはり一つの筆なれど、心の持ち様と筆の立て様で、鬼も書けば佛も書かる」と申上るなり、上人は兩眼よりパラ／＼と涙ながらさせられ「如何にも庄左衛門そこちやぞや、心の持ち様と筆の立て様で、鬼も書けば、佛も書かれる、後生の一

大事に就てもそれと同じことで、平生の時の聽聞の心の持ち様一つで、地獄へおちて無量永劫苦むか、極樂へまいりて盡未來際たのしむか、苦樂昇沈の大違が出来るのちやから、聽聞一つに骨惜みせず、一言一句の御化導も一大事の思ひより大切に聞かねばならぬぞやと、御懸るに御諭しなされたと云ふ話がある

## 因縁

蜂たゝきの念佛

或人が蜂をおもはす叩いたれば死んだ、それを見て、蜂が死んだ可愛いことをちやと思ふたれば、其儘口に念佛が出た故に、さてはけしからぬ念佛を稱へた、御助けうれしやの念佛でもなし、御恩貴ごやの念佛でもなし、只蜂の死んだのを可愛と思ふたらふと念佛が出たが、これは佛恩報謝にはならぬか知らぬと

思ふて、其由蓮如上人へ御尋ね申したれば、上人の仰せに、「信の上なら蜂可愛やの念佛も佛恩報謝になる」と御答なされたと云ふことが御一代記聞書の中に御示しなされたある、信心決定の上は、喜びも歎きも、共に佛恩報謝の念佛を稱ふる助縁となるのであります。

## 因縁

小供の流行歌

蓮如上人、或時小供の流行歌を聞いて、「ア、難有御慈悲であると、ほのくと御喜びなされた、御弟子方が其故を御尋ねなされたら上人の御答なさるゝやう。」  
今で二人が夫婦になるは  
ならぬたすきの丸竹を  
と云ふ流行歌ぢや、このこゝろは、今まで互に思ひ思ふて居りながら添はれなんだに、今

思ふまゝに添ふたうれしさは、「ならぬたすきの丸竹」で、丸竹がどう禪になるものか、ならぬことのなりたは、丸竹を禪にしたも同じことぢやと云ふこゝろ、兩方から添ひたひくと思ふてさわ、ならぬ禪の丸竹をと歌ふのに、この蓮如は地獄の業に引かれて佛とも法とも知らずに暮して居るのに、如來の方より慕はせられて、どうぞくの御念力より、真心徹倒と御慈悲がいたり届いて下されて、今日は他力の丸助けを蒙りたことのうれしさよ、「たまく行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」とはこのことであるご、ふかく御喜びなされたごある。

## 因縁

蓮如上人の臨終

蓮如上人の御入寂は、應八年の三月二十五

日であります、上人は御病中にも御家族や御門徒に對し懇ろに「佛恩を忘れるな、祖恩を忘れるな、冥加の程を忘れては相成らぬ」と誠められた、而して御自身には其往生の近くを喜ばれ、庭前の花を眺めては、さきつゝく花を見る度なおもまたいと願はしき西の彼の岸  
おいらくのいつまでかくやゝみなまし  
むかへたまへや彌陀の淨土へ  
ひさしく生きしと知れやみな人  
乞に御眞影様へ拜禮がいたしたいと云ふて、本堂へ輿で御まいりになりた、それから病床にかへりて辭世の歌をよまれた、

我死せば如何なる人も皆とも

雜行すて彌陀をたのめよ

二十五日朝になりて、今日こそは目出度く往生をさぐるぞと仰せられ、豫て御用意の紋付の御召物を召されました、其時實如上人の仰せに、「それは在家の者の着る着物では御座りませぬか、白衣の上に袈裟衣を召さずしてク様な在家の召物を御用ゐになるは如何なる譯でござりまするか」と、御尋なされたら、仰せに「此蓮如に今日まで如來聖人の御代官をつとめながら、心の内を探りて見れば、愛欲やら名利やら、耻かしながら在家同様の淺間しき身なれど、難有いことには彌陀の本願は悪人正機で、出家よりは在家、男子よりは女人、善人よりは悪人であれば、これまで八

十五年の間は相伴人の姿で居た、この蓮如も今日と云ふ今日は正客の姿で往生がしたいと存じ、斯くは紋付を着るのである」と仰せられたら、實如上人を始めとして、列座の御弟子同行も、皆感涙にむせばれたとあります

**雜錄** 蓮如上人のいろは歌

(い) いくたびも聞くにあかぬは法の道  
そむれば出る信心の色  
(ろ) 六道に引く業障の網をきる  
つるぎなりけり彌陀の名號  
(は) はづかしと問はであやまる法の道  
(に) にせものはかはり安きにかはらぬは  
ふみ迷ふべき人はよかなし  
まことの信のしるし也けり  
(ほ) ほのぼのと心にうかぶ稱名の

(一) ほかより深き信心もなし  
(二) 平生に佛の恩をむねに得て  
ほかにまつべき來迎もなし  
(三) となふれば恨くやみの雲はれて  
むねにはのこる信心の月  
(ち) 智識より迷の闇の手をひかれ  
いまはかいやすく花にこそすめ  
りこんなる人をうらやむ心こそ  
(四) 細れてほすたもとは法の涙にて  
彌陀の誓ひをしらぬへなり  
佛の恩をしる人ぞしる  
(五) るてんして又あひがたき御法なり  
おろそかに聞人ぞ悲しき  
をいぬれば心かたちもよはり行く  
後世のねがひも若きうちなり

(一) 我身をばいたづら者と思ふべし  
よしと思ふは自力なりけり  
(二) かゝる身を助け玉ふの嬉しさを  
常におもふを憶念といふ  
(三) よしあしの心につけて念佛の  
口にたへぬを相續といふ  
(四) たのむ機を我身とむかし思ひけり  
他力になれば我ものはなし  
蓮華座に乘るまでは唱へつゝ  
ほどけの恩を深く報せよ  
(五) そしるまじたとひ咎ある人なりと  
我あやまりはそれにまさり  
罪咎のうすく成ごは覺へねど  
佛の恩ぞふかくしらるゝ  
念佛の數にはよらぬ信なれど

(な) 信にはかすの多き念佛  
南無の二字十八願のかなめなり  
たのむ心をたまはりにけり  
(ら) 薬土をばむかしは急ぐ心なし  
今はたのしむ信心のはなし  
(む) むつまじき人のひがめる教へには  
必ずそれにうつる世の中  
(う) うきことを喜ぶ信も有ものを  
いのり心をやめよみな人  
(の) 穢土をいとはぬしるしなりけり  
後世を願ふ心のふかれれば  
この世の罪もうすぐ成べし  
(お) おのづから口にうかぶもたしなむも  
あまはしこ思ふ心はおのづから  
我機そはねば皆他力なり

(く) くもるとも暗くはあらじ彌陀たのむ  
人はかゝやくむねの月かけ  
(や) 病ひある身に稱名の怠らば  
つねのけだいはおもいやらるゝ  
(ま) 妄念の發るにつけて唱れば  
妄念きわてあとは念佛  
(け) けだいとはまことのうすき心ぞと  
くゆる心を改悔とはいふ  
(け) けだいとはまことのうすき心ぞと  
くゆる心を改悔とはいふ  
(ま) 此度は迷ひ悟のわけめなり  
彌陀の誓ひの至極なりけり  
(ふ) ふしきより不思議と思ふ心こそ  
あつさ寒さもいとふべきかは  
(ひ) 穢土ながらこゝも蓮の臺なり  
彌陀たのむ身はねざめ嬉しき  
(て) 寺鐘を法のすゝめと思ひつゝ

(あ) 聞につけてはとなふべきなり  
あさましと思ひながらも妄念の  
やまぬにつけてたふとかりけり  
(き) さだめなき浮世の中に定るは  
彌陀たのむ身のさとりなりけり  
(き) 機も法も南むあみだ佛のうちにあり  
わが機を添る人ぞあやうき  
(ゆ) 夢にだに佛を拜む心こそ  
ごびにわすれぬ人といふべし  
(め) めぐめたい人あしかれば難波がた  
我身にとかのかへるしらなみ  
(み) 身の咎はくらてもやまぬ身なれども  
しらずこも知るに同じとあやまりて  
(し) 教へを聞ぬ人を悲しき

四苦の隨一なり、老は老衰の義にして盛壯日に衰へ起居安からざる。これを老苦と云ふ。

## 談議

## 百三十歳の老夫婦

江州志賀郡の人、用事ありて丹波の國へまいりしに、道に迷ふて野中の日を暮し、宿を借りるべき處もなく難儀しておると、向ふに柴の庵を見て火の見ゆるを力らに歩みよりて案内を乞ひましたら、内より老婆出で來りましたから、旅人の事情をのべて一夜の宿を乞ひました、すると老婆はいとやすきことなりと承諾してくれましたので、ついに此處に泊りました、さて其家には老人夫婦が居る、旅人は其老人に向ふて、「いくつになられましたか」と尋ねますと、老人の答ふるやう「私は當年百三十五歳であります婆は百三十歳で、

夫婦揃ふて珍らしき長命を致しましたと云ふ旅人は驚いて、「これはけしからぬ長命であるが、さぞ昔の面白き話を覺へてござろう、どうか話して下され」と云ふと、「何角昔の事を覺へようと云ふやうな心づかいがあつては、なかなかまで長命は出來ませぬ、そうであるから二十四度と云ふのは我れへ夫婦の中に子や孫が二十四人ありましたが、皆先き立つて死にましたが、其子や孫の死ぬる度毎に、あの爺とかはればよい、あの婆とかはればよいと云はれたことが丁度二十四度ありました」と話された、たゞひ長命しても此老夫婦のやうになりては、却つて苦しみである。

## 詩

## 人生莫遣頭如雪

## 縦得春風亦不消

これは高嶠が詩である、若い時分の髪は黒々として、丁度春夏の間の樹々の盛なると同じことであれど、段々と年のよるに随ふて、頭の髪もいつしか雪霜を頂くやうに眞白になる、冬の間の雪や霜は春風が吹き出すと消ゆるけれども、頭につまる雪霜は春を迎ふるほどいと白くなるで、油斷をするなと云ふ詩のこゝろである。

## 歌

## 面影のかはらで年のつもれかし

これは小野小町の歌である、この意は死ぬ命は惜からねど、あまりなりふりがかはつてゆくが残り多いと云ふ歌のこゝろ、日本第

一の美人と云はれた小町でも、十七八のすがたで一生おらるゝものではなひ、だんく年のよるに随ふて、顔は皺だらけとなりゆくが娑婆のありさまである。

## 口クハラミツ 六波羅密

## 【諺語】

布施持戒忍辱精進禪定禪の六を指す、波羅密は梵語此に到彼岸さ蹕す、此岸より彼岸に到達せしむるの義なり、

## 昔の旅行

現今は餘程旅行するのも氣樂になりましたが昔の旅行は中々不容易なことであつたそうです、江戸の者が上方見物をしたいと云ふ志を起して、滞りなく旅装束も出来て親戚故舊の暇をつけ、高輪は十八町、大木戸を出ればこれ第一の宿品川ちや、それから大森川崎神奈川の宿々をあとにして、追々と京都に向

いで進むのであるが、さて道中は悪い奴が多い。心のよくなない川越人足や雲助に不當なる賃錢をねだられるとか、胡魔の灰に巾着を巻き上げられるとか、宿場女郎にひつかつて下らない錢を使ふとか、箱根八里の山越で底豆を踏み出したとか、名物の安倍川餅を食過て下痢を起したとか、さもなくの障害が起つて路傍で行きたおれ宿の役場の御厄介になるものもある。其初志の如く、京都へ上つて王城を拜し大三輪屋の松や妙國寺の蘇鐵に眼を拭ひ、一日千本の吉野の櫻にこれはの歎聲を發し、あいに愛もつ鮎の壽司に舌鼓打つて、小町紅やあられ酒を土産にもつて目度江戸へ歸つてくるものは半分あるかないかであろうよ。佛道修行も丁度その通りで折角

發心はしても、慳貪邪惡瞋恚懈怠亂愚痴の六弊といふものがあつて、それぐ邪魔をして彼岸までいたるのを妨げるのである。依て佛道修行の旅立をした人は六波羅の鎧甲冑に身をかためて進まねばならぬのであります。六波羅密と云ふのは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つであります。この六つの鎧甲冑さへ一寸の間も脱がなかつたならば、六弊の賊も侵すことが出来ないので、樂々と目的の彼岸に到着することは露ほども疑ふ處はありません。

**口セツ 蘆雪** 人名  
長澤蘆雪、淀の藩士なり、圓山應舉の門に入りて畫を學び途に一機軸を出せり、寛政十一年六月没す、年四十五、

**談叢****蘆雪の奮勵**人名

長澤蘆雪は名は魚、字は水計といつて淀の藩士である。有名な畫伯應舉の門人となつて毎朝、淀から京都四條の應舉の宅へ通つたのである。或る時、通路の小川が凍つて、其の中の魚がごちこめられて浮遊することが出来ず、非常にくるしげな様子であるので、蘆雪は是を憐んで救ひ出さうと思つたが、何分氷の下に居ることも、ドミすることも出来ないので、其の儘京に登り、應舉の家へ行つてその晩歸路に、その魚を見たところが、朝にかはつて氷は次第に解け、魚は自由を得て、イカニモ喜んでおる様子なので、翌日、此事を應舉に話すと、應舉がいふには、「其れは真に面白い話である。我が畫をかくのも其れと同じで、師に就て勉強したことは永年である。

**ワ之部**

## ワケキヨマロ ワゴウ

二七六

備前の人なり、頗る故事に通じ民部省例二十巻の撰あり、天應十八年卒す、年六十七、

談叢

和氣清磨の誠忠

孝謙天皇は非常に僧道鏡を御寵愛遊ばされ遂に天子の御位さへも遂に道鏡に譲ろうとなされた、其時に和氣清磨が以て宇佐八幡宮の

神託を伺はせられた、清磨宇佐に至りて神託を伺ひ復命して云ふやう、「我國は開闢以來君

臣の分定まれり、未だ臣として君となれるものあらず、道鏡何者なれば敢て天位をのぞむぞ、速かに誅すべしとの宣へり」と奏したから、道鏡は非常に怒つて清磨の名をけづりて穢麿となして大隅國へ流しましたとある、如何に大義名分のわからぬ世とは云ひながら、

道鏡の如き天子の位を篡はんとする亂臣賊子のはびこる中にあつて、一命をすてゝ皇室をまもり、毅然として誠忠を盡せしもの、實に日本魂の發現と云はねばなりませぬ「護王の社」と稱して千載の下に芳名を流すは最も千萬のことあります。

## ワゴウ 和合

〔術語〕

過失あれば相規し、患難あれば相恤み、互に敬順してに睦じく交はるを云ふ。

談叢

袈裟の話

袈裟は和合といふことを示して居る即ち大きな切れど、小さな切れど相より相ならんで一つの袈裟といふ形を造つて居るのである。釋尊は道路に人を捨てた布切れを集めて、袈裟一枚に繕はれ其を御用ひになつたとあ

る、決して吾々のやうにわざく一枚の大好きな切れを大小長短に切りちらして之を一つに合せるやうなことはせられなんだのである、さて袈裟は和合の印であるが世の中には大小貴愚賤機々の人が集つて一つの社會團體國家を形成して居るのであるから上下心を一にして和衷協同するに非ざれば到底その社會團體、國家は立ち行ぬわけである、袈裟をかけた姿は尊いものであるが之が形ばかりの袈裟で内心不和では何にもならぬ鳴長明といふ人が、

剃りたきはこゝろの中の亂れ髪

つむりの髪はこゝにもかくにもお互か頭を剃るは精神を剃るのしるし、内心の散亂粗動を静めんが爲である、釋尊が七

歳の出家と梵網經にあるは形の出家に非ずして内心の出家である浮世の束縛を絶たれたのである、諸君も心内の亂髪を切り拂ひ煩惱の塵埃を吹き去つて以て光風清月一點の黒雲なき心中の平和を得て内此の修養を以て外一家一郷一國の上に全力を注いで家富國榮ゆるやうにせられたなら、之の家庭之の社會之の國家各一枚の袈裟となり平和に満つることなるとは何ぞ嬉ばしき事であるまい。

談叢 狡猾なる猿

或處に一匹の猫あり、一日大に飢たりければ、共に食物を探さばやど相連れだちて出たりしに、やがて一片の肉を拾ひたり、然るに前なる猫、「此肉は己れが拾ひたるものなれば正しく我れ所有なり」とぞ云ひけるに、後

ワゴウ

なる猫大に怒りて「イヤとよ其肉は汝が拾ひたるかなれども、正しくこゝに落ちたるを見付けたるは我なれば速かに其肉を渡すべし」とて、互に争ひて噛み合ひを初めたり、此様子を伺ひ居たる一匹の猿は、一つの天秤を持ちて二匹の猫の間にはいりて、「卿等今其肉の所有を争はんよりは、寧口此天秤にかけて等分するに如かず」とぞ云ひける、爰に二匹の猫は最もなきことと思ひ、猿の云ふがまゝに一任しました、猿はホヽ笑みつゝ先づ其肉を噛み切りて二片となし天秤にかけてはかりして一方僅かに重かりしゆへ、其重き方を一口食ひたりされば今迄重もかり十方が反りて軽くなりて平均せざれば、再び重き方を一口食ひたり、斯くして幾度もく、或は、かり或

は食ひ、今は残り少くなぞなりけるゆへ、  
二匹の猫は初めて心づき、「ヤヨ猿君には何を  
なし玉ふぞや、我等に其肉を等分せんと斯  
く食ひ減らさるゝは何たる不都合ぞや、我等  
今飢にせまり、わづかの不平均を問ふべき遑  
なし、其儘我等に返されたし」と申たりしに  
猿は「ハテ奇怪なることを申さるゝものかな  
我先程より卿等の爲めに、如何にしても平分  
しつかわさんとて斯く心を勞したるにもかゝ  
わらず、今に至りて返却を乞はるゝなど、以  
ての外の仰せなり、今こゝに残れる肉は今迄  
の勞の報酬として、われ確かに拜領すべき筈  
なり」と云ふて、煩を充たして逃げ去りたり  
こそ、これは寓話である、國にありて國民相  
争へば其國を失ひ、家にありて兄弟相争へば

其家を破る、故に佛陀は我等に和合の徳を懇  
ひに教へたまふたのである。

一七三一年二月、ワージニヤ州に生る、父  
ン、母はマリー・ホールと云ふ、北米合衆國

て居る知つて居るか、これは父が蒔く時に、  
ワシントンと文字の形にまきつけたで、生へ  
るときワシントンも生へた、すべき物事は何  
でも初めに善きことをしておけば善きものと  
なり、惡しきことになれしめば惡しきことに

卷之二

ワシントンが初めて學問を仕出した時に、父親がかねて用意した居た四角な植木鉢に種子を蒔きて、ワシントンと云ふ字の形にまきつけたが、ワシントンと云ふ文字通りに草がはへた、すると其植木鉢をワシントンにみせて「これは如何にはへておるや」と尋ると、ワシントンはジット見て「ア、私の名のワシントンとなりて生じて居る」と答へた、其時父親が「何故これはワシントンとなりて生じておる」

なきものにへ よく最初が大切であるぞよ」と云ふて教へられたとある、これが知らず識らず因果の道理になつてある。

火説書　ワシントンの寛量

ワシントン大統領たりし時、或役員の欠を補はんと欲し、其友人中の最も已が意見に反対するものを推舉しました、或人あやしんで間ふやう、「今公は一臂の力を借らんが爲めに人を要するのでありませう、然るに其常に意見の合はざるものを作りせらるゝは如何なる

ワシントン

思召でありますか』ワシントン莞爾として之に答へて云ふやう、予もし某と初めより意見の投合するを知らば、某の力を借りるには及びませぬ、今意見の投合せざるを知つて而して之を推舉するは、其力を借りて予が説の不良なる部分を排去せんとするのである』と云はれたてある、反対者を用ひて已のが説の不良なれ部分を排去せしめんとするは感服の至りである。

談叢 時計と秘書官

米國の大統領ワシントン、秘書官に約して

# 布教大辭典終

明治四十二年十一月二十日印刷  
同 年十一月廿五日發行

布教大辭典	輿論
定價金五圓	



京都市下京區中珠數屋町烏丸東入  
二十人講町二十二番戸

發行所 京都市東六條(電話貳貳五八番)法藏館

著作者 田淵 靜 緑

印 刷 者 西村七兵衛

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入  
二十人講町二十二番戸

何時に會すべきを以てす、時至て秘書官來らず、待つこと十分にして來る、ワシントン云ふ、

卿、何が故に時間を守らざりしそ、秘書官、時間を守らざるにあらず、我が時計が狂ひ居りしなり、ワシントン、卿、速に其時計を改めよ、然らずんば我は秘書官を改むべし、時間厳守すること斯の如くであつた。

# 裝新便輕

# 金華會館

1947-1948  
1948-1949  
1949-1950  
1950-1951  
1951-1952  
1952-1953  
1953-1954  
1954-1955  
1955-1956  
1956-1957  
1957-1958  
1958-1959  
1959-1960  
1960-1961  
1961-1962  
1962-1963  
1963-1964  
1964-1965  
1965-1966  
1966-1967  
1967-1968  
1968-1969  
1969-1970  
1970-1971  
1971-1972  
1972-1973  
1973-1974  
1974-1975  
1975-1976  
1976-1977  
1977-1978  
1978-1979  
1979-1980  
1980-1981  
1981-1982  
1982-1983  
1983-1984  
1984-1985  
1985-1986  
1986-1987  
1987-1988  
1988-1989  
1989-1990  
1990-1991  
1991-1992  
1992-1993  
1993-1994  
1994-1995  
1995-1996  
1996-1997  
1997-1998  
1998-1999  
1999-2000  
2000-2001  
2001-2002  
2002-2003  
2003-2004  
2004-2005  
2005-2006  
2006-2007  
2007-2008  
2008-2009  
2009-2010  
2010-2011  
2011-2012  
2012-2013  
2013-2014  
2014-2015  
2015-2016  
2016-2017  
2017-2018  
2018-2019  
2019-2020  
2020-2021  
2021-2022  
2022-2023  
2023-2024  
2024-2025  
2025-2026  
2026-2027  
2027-2028  
2028-2029  
2029-2030  
2030-2031  
2031-2032  
2032-2033  
2033-2034  
2034-2035  
2035-2036  
2036-2037  
2037-2038  
2038-2039  
2039-2040  
2040-2041  
2041-2042  
2042-2043  
2043-2044  
2044-2045  
2045-2046  
2046-2047  
2047-2048  
2048-2049  
2049-2050  
2050-2051  
2051-2052  
2052-2053  
2053-2054  
2054-2055  
2055-2056  
2056-2057  
2057-2058  
2058-2059  
2059-2060  
2060-2061  
2061-2062  
2062-2063  
2063-2064  
2064-2065  
2065-2066  
2066-2067  
2067-2068  
2068-2069  
2069-2070  
2070-2071  
2071-2072  
2072-2073  
2073-2074  
2074-2075  
2075-2076  
2076-2077  
2077-2078  
2078-2079  
2079-2080  
2080-2081  
2081-2082  
2082-2083  
2083-2084  
2084-2085  
2085-2086  
2086-2087  
2087-2088  
2088-2089  
2089-2090  
2090-2091  
2091-2092  
2092-2093  
2093-2094  
2094-2095  
2095-2096  
2096-2097  
2097-2098  
2098-2099  
2099-20100

新案說教大家  
田淵靜綠師立案

日本民族大發展の新時代に社會の文物面目一新せる時に際し我布教家獨り舊幕時代の陳腐舊習を讀破せしに優り、加筆を以て百席の演説を供する。本編は、古文書の解説と、その解説の歴史的背景を含むものである。

容内

讚題傳林解叢談謠笑逸

佛教各宗の金言祖訓を提唱して  
快に説破せり  
各宗高僧名僧の面影を偲ばし  
め以て教義を鑽仰せしむ  
抱腹絶倒の中に偉大なる教訓  
を興ふるこゝ妙なり  
人口に憎疾せしる俚諺を解釋し  
精神修養の教師こそす  
革新なる事實的教訓を蒐め因  
果應報の證明をなす

△△△△△  
雜家和比格  
錄庭歌喻言

寸鐵人を殺す的の警訓迷夢  
城已所顯にて未所顯を現し法  
無常信念等の十數門に一翻  
嘆すべき和歌溢る  
婦人に關する言行、及、烈女  
の言行は家庭の明星也  
以上各部に漏れたる良材を  
藏め資料の掉尾とする

活潑なる演説家の弾薬庫なり

精撰せる材料の博覽會場なり  
新案來說教大家 田淵靜緣師立業

冊一全  
錢拾參圓壹金 價定  
錢八 稅郵  
圓 壹金 價特  
錢八 稅郵

ヨ-4115

田溫頤 明院殿題辭  
淵靜緣師思著

平かな付

正價 參拾五錢  
郵稅 四錢

# 新案 本願成就文

全一冊

圖成就は一流の淵源にして安心の至極也。苟も如來の慈悲を語るものに是に依らざるべけんや。而も從來の談錄、概ね陳腐鄙俗にして時世に適應せざるは識者の悲める所、田淵師此に見るあり多年の苦心經營により殊に清新なる譬喩因縁等多くの材料を撰み、新意匠を凝らし且つ師が獨得なる流麗の語調を用ひて本願成就の眞精神を發揮せり。若し信徒之を讀まば座しながら安心の極意を知り得べく、殊に師が多年實驗の結果なれば世の僧侶直に之を實際に用ひるには殆んど遺憾なからしむべし是非一讀再讀の上著者の苦心を知らんことを乞ふ

發

行 所

京都市東六條  
電話貳貳五八番

法 藏 館

終

